

【コミュニティ意識の分析】

これからコミュニティ意識についてみていこう。コミュニティ意識にかんする質問は、問 14(1)～(21)の全 21 問である。

はじめに、全体的な傾向としていえることは、唐津市民は地域参加にかんして消極的ではないということが伺える。また地域を何とかしたいという意識も多くあるということも伺える。その一方で行政にたいして指導力を求め、住民と協力しながら地域をつくっていくことを考えているようである。また、後でみるが、問 14(11)の結果をみると分かるように、地域の繋がりが弱くなっていると思っている人が多くいる。そして、地域の未来にたいして希望を持っている人たちとそうでない人たちは、おおよそ半分半分となっている。

以下では、コミュニティ意識について、どういった人たちがどのような意見を持っているかという観点から分析していく。ここでは、21 個ある質問を「積極的に地域へ参加する質問グループ」「地域参加にかんする消極性を聞く質問グループ」「行政との関係性を聞く質問グループ」「地域自治にかんする質問グループ」「その他の質問グループ」に分け、回答者の各属性、すなわち「性別」、「年代」、「職業」、「居住地区」、「愛着心を感じているかどうか」等との関係性をみることにする。

◆「地域参加にかんする積極性を聞く質問」

この質問グループは、

問 14(3) 住みよい地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい、

問 14(4) 地域のみなどと何かをすることで自分の生活の豊かさを求めたい、

問 14(7) 町内会（自治会）の世話をしてくれと頼まれたら、引き受けてもよい、

問 14(20) 地域社会を指導するリーダーになってもよい、である。

全体的な回答傾向は次の図の通り（図 1）。

問 14(3)(4)については、肯定的意見が半数を超えている。地域参加への意識はやや高いといえるだろう。しかし、地域を牽引する役

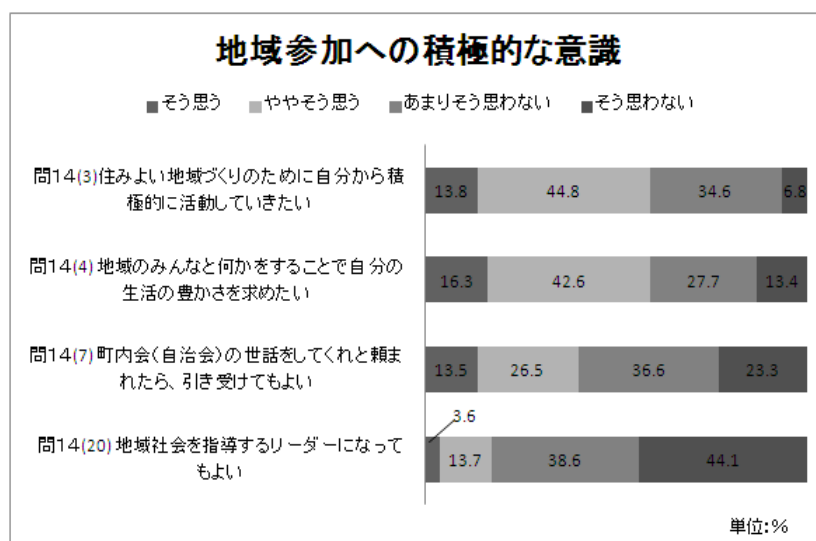


図 1

割を担うことに関する質問(7)(20)については、肯定的意見が4割に満たなかった。

これらの質問と性別、年代などの各属性との関係を調べてみた。なお、ここでは分析のために、「そう思う」「ややそう思う」を「肯定的」回答とし、「あまりそう思わない」「そう思わない」を「否定的」回答とし、選択肢を統合している。

(3)(4)についていうと、地域のみならず活動をしたいという「意識」については、有意差はみられなかった。性別や年代によって、回答傾向が異なっているということではなかった。

しかし、地域をまとめるリーダーにかんする質問(7)(20)については、有意差がみられた。地域をまとめるリーダーとなってもよいと考えているのは、女性よりも男性、50歳以上の世代、居住年数が10年以上の人たち、である。結果は以下に示す。

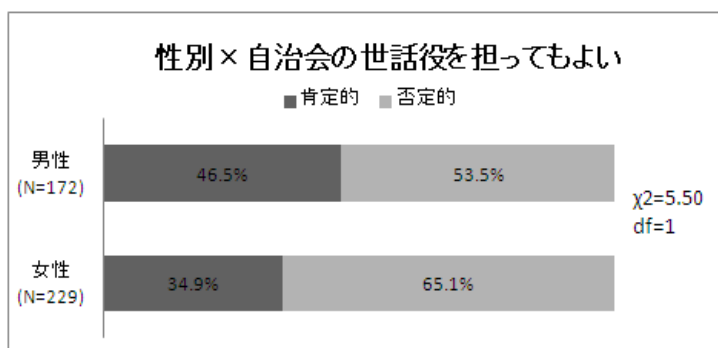


図 2

まず性別と(7)のクロス表をみると、質問に肯定的な答えをした人は、男性と女性とを比べると、10ポイント以上の違いがある。これは、5%水準で有意差がある。男性の半数近くの方は、自治会の世話役を引きうけてもよいと考えているようである。女性

においても3割程度いることも注目しておく数字であろう。

次に、年代別のクロス表をみてみよう。50歳未満の世代では約32%、50歳以上の世代では約44%の人たちが、肯定的回答をしている。これは5%水準で有意差がある。ということは、50歳以上の世代は、そうでない世代と比べると、自治会等で活躍したいと思っているようである。やはり、50歳以上の世代のほうが地域参加により積極的といえるだろう。

(20)「地域のリーダーになってもよいかどうか」について、まず男女別でみると、この質問に肯定的な回答をした人は、男性が26.1%、女性が10.7%であり、これは有意差がみられる(χ²=16.59, df=1, p<.01)。また、年代別でみると、50歳未満の世代では9.4%、50歳以上の世代では22.0%が、肯定的な回答をして

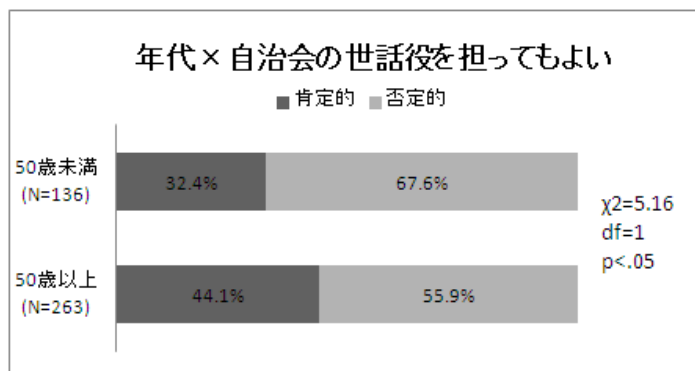


図 3

おり、10ポイント以上の差がある。この差についても有意差がみられた ($\chi^2=10.08$, $df=1$, $p<.01$)。この質問についても、(7)と同様な傾向がみられた。

参考に記しておくが、(7)について、居住年数で層別して年代との関係をしらべてみた。これは、年齢が高くなると参加する意欲が高いけれども、実際のところそれらの関係は居住年数に左右されているのではないかという疑問を検討するためである。

居住年数が10年以上のグループでは、年代間に差はない。一方、居住年数10年未満のグループでは、年代間に大きな差がみられる。こうしたことが示していることは、居住年数が10年以上の場合、年代に関係なく4割の人が自治会の世話を頼まれてもよいと考えているのに対して、居住年数が10年未満の場合、若い世代は引き受けたがらないが、そうでない世代では約半数の人たちが引き受けてもよいと考えているということである。

以上のことから分かることは、＜地域のみならず一緒に活動したい＞という「意識」(質問14(3)(4))は性別や年代の違いに関係なく、多くの人に広まっているが、地域を指導するという点については、年代や居住年数による違いがみられるということである。さらに細かくいえば、自治会の世話役についていえば、居住年数が10年未満の人たちのなかでも50歳以上の世代では、50歳未満の世代と比べて、それを引き受けてもよいと答えている。そして居住年数が10年以上となると、年代による違いはなくなる。居住年数が長くなると、年代に関係なく地域にたいする責任感が生まれるといえるだろう。

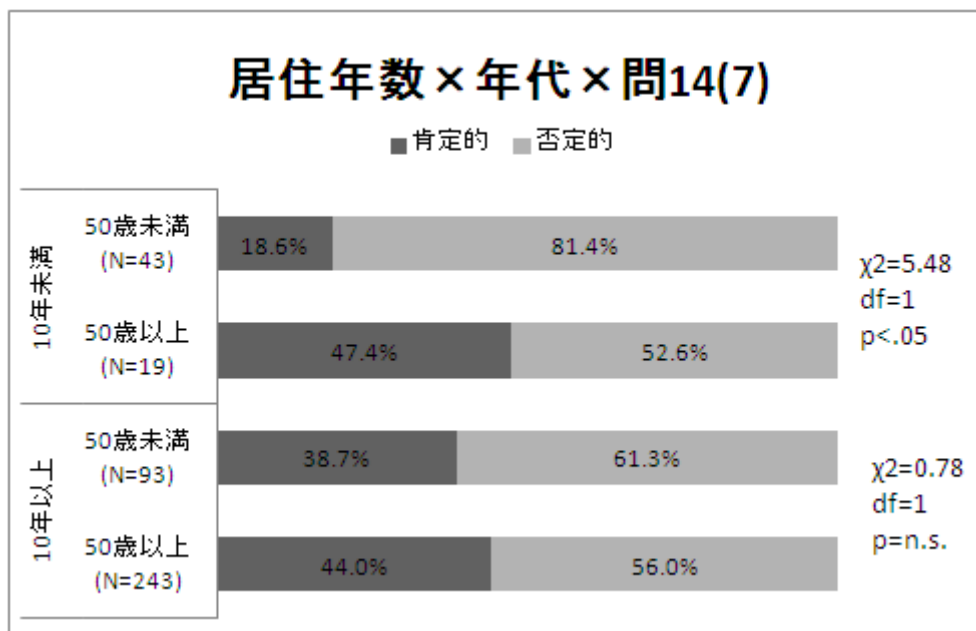


図 4

◆「地域参加にかんする消極性を聞く質問」

この質問グループは、先のグループとは対となっている。それゆえ、この結果も先の質問グループの結果からも推論できる。この質問グループは、

問 14 (1)地域問題の解決は、行政に任せておけばよい、

問 14 (2)この地域をよくするための活動は、熱心な人に任せておけばよい、

問 14 (5)自分に関係なければ地域での活動に積極的に参加しようとは思わない、

問 14 (10)地域のことは、自分が行動を起こさなくても誰かがやってくれる、

問 14 (13)地域のことについては、できるだけ関わりたくない、

である。

全体的な回答傾向は、次の通りである。

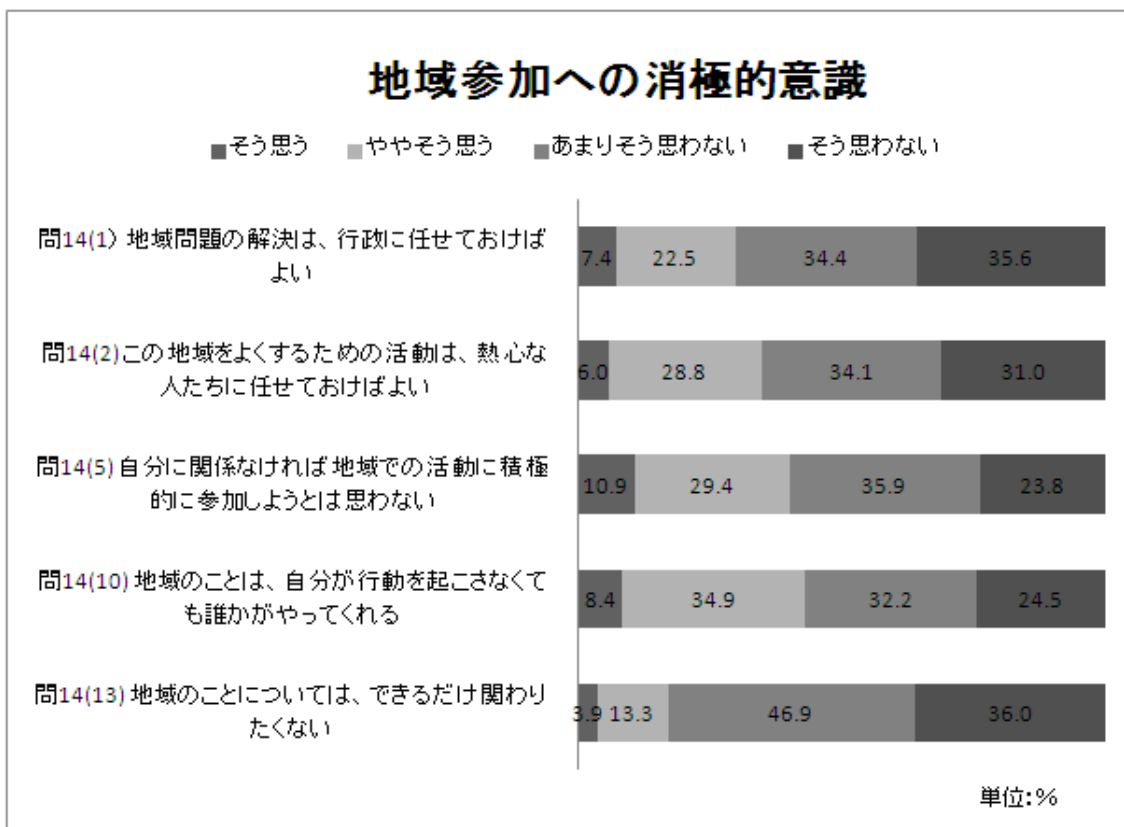


図 5

どの質問についても、否定的な回答が 5 割を超え、特に(13)については、否定的意見が 8 割を超えている。大きくみれば、地域参加について消極的な意識をもっているほうが少ないといえる。ただし、問 14 (13)をみると、地域のことについて関わりたくないと思っている人は 2 割で、多くの人には地域に関わりたいと思っているけれども、しかし問 14(2)(5)(10)の結果をみると、地域に関わりたいと思っている人たちのなかでも約 3 分の

1の人たちは、地域のことは自分ではなく誰かがやってくれるという意識を持っているとも解釈できる。

この点を確認するために問14(13)と問14(10)とのクロス

表を作成した(表1)。セルを対角線にみると関連性があるとわかる($\phi=.277, p<.01$)。常識的に考えてもわかるように、地域のことに関わりたくないと思っているならば、地域のことは誰かがやってくれると思っているだろう。そうしたことが表から読み取れる。しかし、クロス表の「否定的」の行をみるとすぐに理解できるように、問14(13)に否定的回答をした人の約37%の人が、地域のことは誰かがやってくれると考えているようである。

こうした結果と、先の積極性にかんする結果を併せて考えると、地域への参加「意識」は多くあるけれども、そういう人でも、実際のところは、誰かがやってくれるのではないかと考えていると考えられる。実際にそれを示すために、問14(3)「住みよい地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい」と問14(10)(5)とのクロス表を作成した。結

表1 問14(13)と問14(10)のクロス表

		地域のことは、誰かがやってくれる		合計
		肯定的	否定的	
地域のことに は関わりたく ない	肯定的	度数 51 %	20 28.2%	71 100.0%
	否定的	度数 127 %	215 62.9%	342 100.0%
合計		度数 178 %	235 56.9%	413 100.0%

$$\chi^2=28.86, df=1, \phi=.277, p<.01$$

表2 問14(3)と問14(10)のクロス表

		地域のことは、誰かがやってくれる		合計
		肯定的	否定的	
地域づくりに 積極的に活動 したい	肯定的	度数 83 %	159 65.7%	242 100%
	否定的	度数 96 %	74 43.5%	170 100%
合計		度数 179 %	233 56.6%	412 100%

$$\chi^2=19.98, df=1, p<.01$$

表3 問14(3)と問14(5)のクロス表

		自分に関係なければ、 地域活動に参加しよう と思わない		合計
		肯定的	否定的	
地域づくりに 積極的に活動 したい	肯定的	度数 69 %	171 71.2%	240 100%
	否定的	度数 96 %	73 43.2%	169 100%
合計		度数 165 %	244 59.7%	409 100%

$$\chi^2=32.43, df=1, p<.01$$

果は表の通り（表 2、表 3）。推論した結果の通り、問 14(3)について肯定的に答えた人のなかで、約 3 割の人が(10)「地域のことは、誰かがやってくれる」という問にたいして肯定的に答えている。同様に、(3)で肯定的に回答した人のなかで 3 割近くの人が、(5)「自分に関係なければ、地域活動に参加しようと思わない」という問について肯定的な回答をしている。

こうした結果からすると、「自分のみならずみんなのために」という「公共」意識を持って地域に参加したいと思っているのは、全体の約 3 割から 4 割ということになるだろう。そうしたことがデータから透けて見える。

ただし、ここで勘違いをしてほしくないが、利己的な考えから地域参加することが間違いといっているわけではない。ここで示したかったのは、地域参加しようとしている人が、地域参加をどのようなものとしてとらえているのかを明らかにしたかっただけである。これをどのようにとらえるのかということは、地域や地域への参加をどのように考えるのかということと一緒にして考えるべきものであろう。

次に、回答者の属性によってそれぞれの質問の回答の傾向が違うか調べてみた（以下の括弧内の数字は肯定的意見の回答の割合）。(1)については、学歴による違いがみられ、「中学校・高校卒業」のグループで質問に対する肯定的な意見が多かった（中学校・高校卒業 34.9%、専修学校・短大卒業 21.4%、大学・大学院卒業 22.6%、 $\chi^2=7.20$, $df=2$, $p<.05$ ）。

(5)では、年齢、愛着心、居住地域に違いがみられ、若い世代（50 歳未満の世代 49.3%、50 歳以上の世代 35.3%、 $\chi^2=7.34$, $df=1$, $p<.01$ ）、愛着心を感じていない人たち（愛着心を感じる 37.4%、愛着心を感じていない 59.3%、 $\chi^2=9.30$, $df=1$, $p<.01$ ）、旧唐津に居住しているグループ（旧唐津に居住 44.0%、旧町村に居住 34.0%）に、肯定的な意見が多かった。やはり若い人や地域に愛着心を感じていない人は、自分に関係のないことには関与しないようである。また、都市化されている旧唐津でも同様な傾向がみられる。

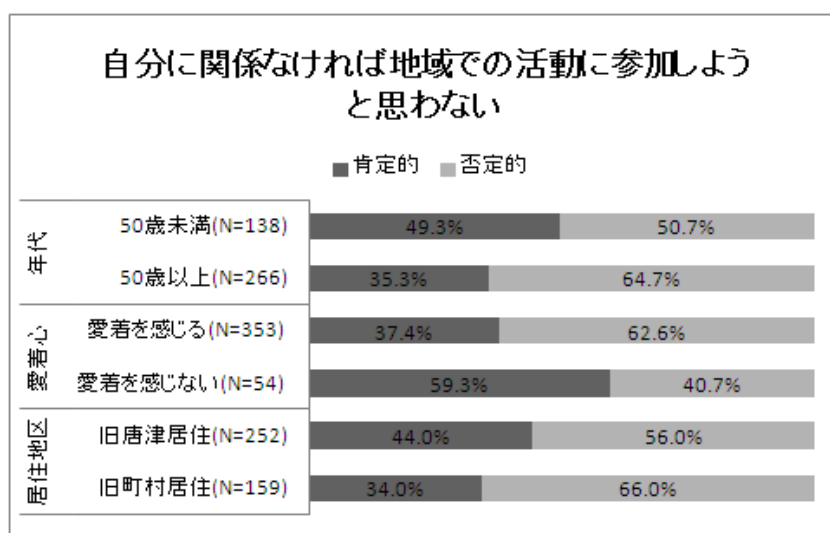


図 6

(10)では、性別（男性 36.5%、女性 48.7%、 $\chi^2=6.09$, $df=1$, $p<.05$ ）、年代（50歳未満の世代 53.6%、50歳以上の世代 38.1%、 $\chi^2=78.90$, $df=1$, $p<.01$ ）、居住年数（居住年数10年未満 57.8%、居住年数10年以上 41.0%、 $\chi^2=6.18$, $df=1$, $p<.05$ ）、愛着心（愛着心を感じる 40.7%、愛着心を感じていない 61.8%、 $\chi^2=8.16$, $df=1$, $p<.01$ ）による違いがみられた。(10)の

「地域のことは、自分が行動を起こさなくても誰かがやってくれる」という質問は、ある意味地域社会の「タダ乗り意識」といえるだろう。この「タダ乗り意識」が比較的多くみられるのは、女性、50歳未満の世代、居住年数が10年未満の人たち、愛着心を感じていない人たちである。

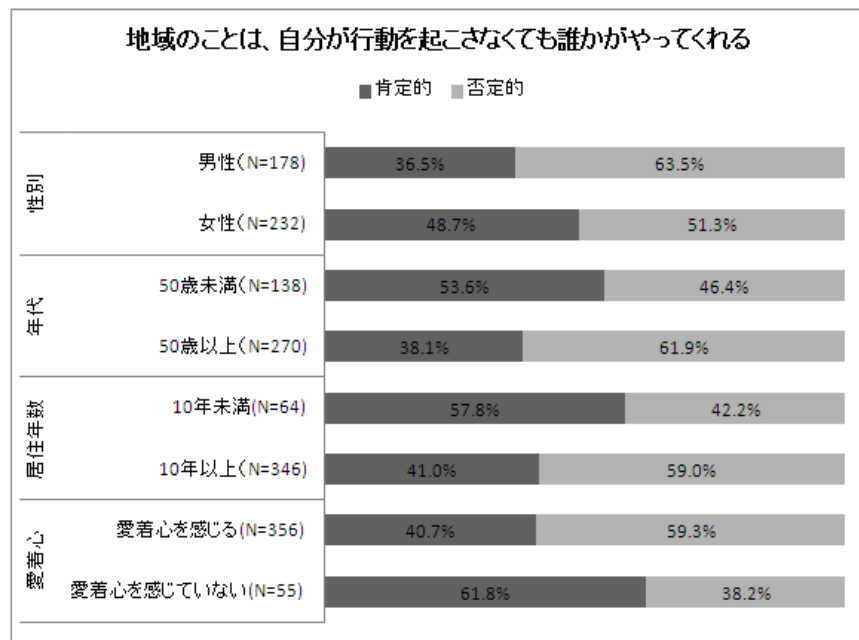


図 7

(13)では、愛着心による違いがみられた（愛着心を感じる 15.0%、愛着心を感じていない 27.3%、 $\chi^2=5.17$, $df=1$, $p<.05$ ）。

なお(2)については、属性による違いはみられなかった。

概括的にいえば、地域活動に消極的な考えをもっているのは、「女性」、「50歳未満の世代」、「居住年数10年未満」、「愛着心が無い」というグループである。特に、「愛着心」についていえば、(5)(10)(13)と関係している。このような結果からすると、地域への消極的な意識は、「愛着心」と関係が深そうだといえるだろう。

◆「行政との関係を聞く質問」

この質問グループは、

問 14(12)住民の意見は市政に反映されている、

問 14(16)地域づくり・まちづくりについて行政がもっと指導力を発揮するべきだ、

問 14(17)これからは地域をよくするために、地域住民と行政が積極的に協力すべきだ、である。

全体的な回答傾向は、次の通りである。

(12)の質問は、

「政治的有効感覚」を聞く質問である。これについては、否定的な意見の方が圧倒的に多い。ただし、この質問についていえば、政府にたいする政治的有効感覚も同様な回答となるこ

とが多い。他の地域と比べて、否定的意見が多いというのは分からない。(16)の質問については、7割以上の方が行政の指導力を期待していることが見受けられる。(17)に質問については、9割以上の方が肯定的意見を持っている。「協働」意識というものが多くの人に広まっているようである。

属性との関係をみると、(12)以外では、有意な差はみられなかった。これが意味していることは、これらのことについて性別や年代などの違いで回答傾向に違いはみられない、同じような傾向を示しているということである。性別、年齢などに関係なく、市民は行政にたいして、指導力を発揮し、住民と協力しながらまちづくり・地域づくりをおこなうことを求めている。

(12)について、同じように属性の違いによって回答傾向が異なるかを調べてみると、この質問にたいして肯定的に答えたのは、性別では女性（男性：17.9%、女性：29.6%）、年代別では50歳以上の世代（50歳未満：18.7%、50歳以上：27.7%）であった。

(12)について、詳しくみるために、性別で層別して年代とのクロス表を作成した（図9）。肯定の割合が最も高いのは、女性の50歳以上の世代の35.4%であり、逆に否定の割合が最も高いのは、男性50歳未満の世代の83.9%であった。しかし、男性において年代による回答傾向の違いはないようである。女性の方をみると、肯定する意見は50歳未

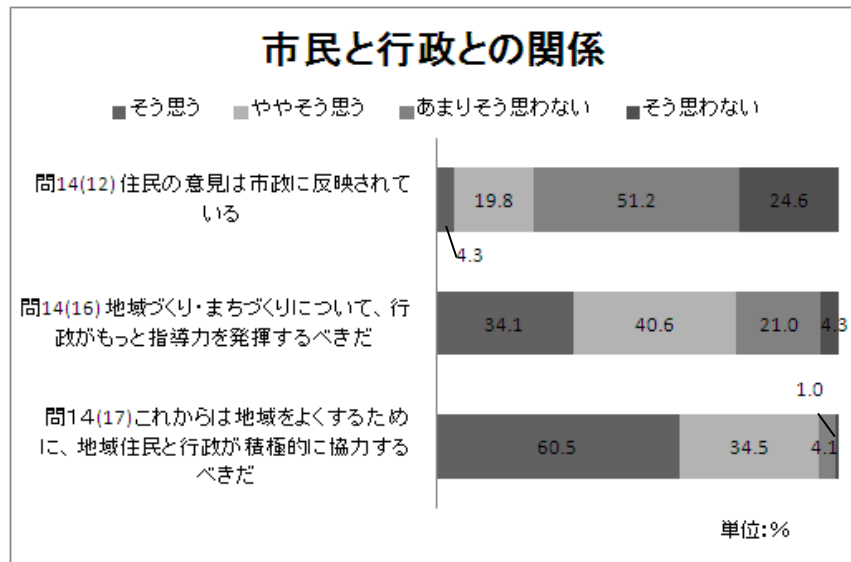


図 8

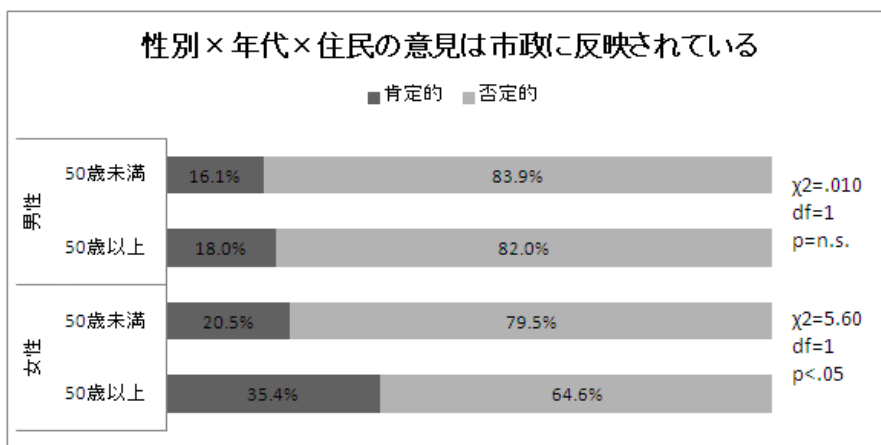


図 9

満の世代で 20.5%、50 歳以上の世代で 35.4%である。この差は統計的に有意である。以上の結果からすると、男性においては年代に関係なく約 2 割弱の人たちが、

該当質問について肯定的な意見をもち、女性では 50 歳以上の世代がそうでない世代より、肯定的な意見をもっているということとなる。

なお、この問 14(12)については、別の観点からも分析している。この問について地縁活動をしているかどうかで、回答傾向が違ってくるかどうかを調べてみた。問 14 のコミュニティ意識についての質問についていえば、地縁活動をしている人とそうでない人では、回答の傾向が異なっていた。総括的にいえば、地縁活動をしている人は、やはり積極的意識は高く、消極的意識は低く、コミュニティ意識は高くなっている。しかし、この問 14(12)にかんして、他の問と異なる傾向を示したところがあった。その結果を紹介したい。

年代層別し、地縁活動に参加しているかどうかで分けて、この問の回答傾向をみてみた。

図 10 をみてみると、50 歳未満で地縁活動をしている人の肯定的回答が低くなっていることがすぐにわかる。50 歳以上のグループのほうをみてみよう。このグループ

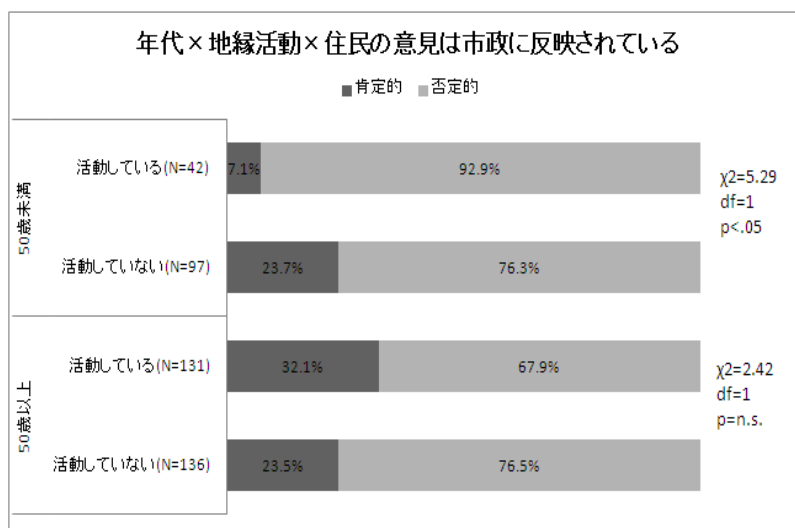


図 10

では、地縁活動している人のほうが、そうでない人たちと比べると、肯定的回答が 10 ポイント近く高くなっている。ただし、これには有意な差はみられない。50 歳未満のグループをみてみると、地縁活動をしている人とそうでない人の差が大きいことが分かる。検定結果も有意となっている。これまでみてきたコミュニティ意識にかんする質問につい

て同じようにクロス表の分析をおこなったが、この問 14(12)の回答の傾向は、これらの回答傾向と異なっている。他の問では、50歳以上の世代においては、地縁活動をしている人と活動していない人の間で違い（有意差）

表 4 年代×地縁活動×問 14(3)のクロス表

			住みよいまちのために積極的に活動したい		
年齢(2区分)			肯定的	否定的	合計
50歳未満	活動している	度数	27	15	42
		%	64.3%	35.7%	100%
	地縁活動 活動していない	度数	53	44	97
		%	54.6%	45.4%	100%
合計		度数	80	59	139
		%	57.6%	42.4%	100%
50歳以上	活動している	度数	91	42	133
		%	68.4%	31.6%	100%
	地縁活動 活動していない	度数	66	67	133
		%	49.6%	50.4%	100%
合計		度数	157	109	266
		%	59.0%	41.0%	100%

50歳未満： $\chi^2=1.16$, $df=1$, $p=n.s.$ / 50歳以上： $\chi^2=9.72$, $df=1$, $p<.01$

がみられ、50歳未満の世代においては、地縁活動をしている人と活動していない人の間で違い（有意差）はみられなかった¹（例として、問 14(3)のクロス表を示しておく）。しかしこの問では、50歳以上の世代は有意差がみられず、50歳未満の世代において有意差がみられ、かつ活動していると回答している人のほうに肯定的意見が多くなっている。

このことが示していることは、50歳未満の世代では、地縁活動をしている人のほうがそうでない人より政治的な有効性感覚を有していないということである。この世代で地縁活動している人は、地域に根ざした活動をしているのにもかかわらず、そうした努力が報われていないということを感じているのではないか。こうしたことが、市政にたいする「相対的な不満」を生んでいると考えられる。

¹ こうしたことからすると、50歳未満の世代では、地縁活動をおこなっていることが、彼らのコミュニティ意識にたいして影響を与えているということはないようである。一方、50歳以上の世代では、地縁活動をおこなっていることがコミュニティ意識に影響を与えているようである。

◆「地域自治にかんする質問」

この質問グループは、

問 14(6)地域をよくするためには住民みずからが決定することが重要である、

問 14 (9)地域づくりについては、積極的に外部の意見を聞くべきだ、

問 14 (14)地域づくり・まちづくりには強力なリーダーが必要だ、

問 14(15)地域社会において最終的に頼りになるのは、行政組織ではなく住民間の絆だ、

問 14 (18)地域のためなら、少々の犠牲を払っても住民として協力すべきだ、

である。

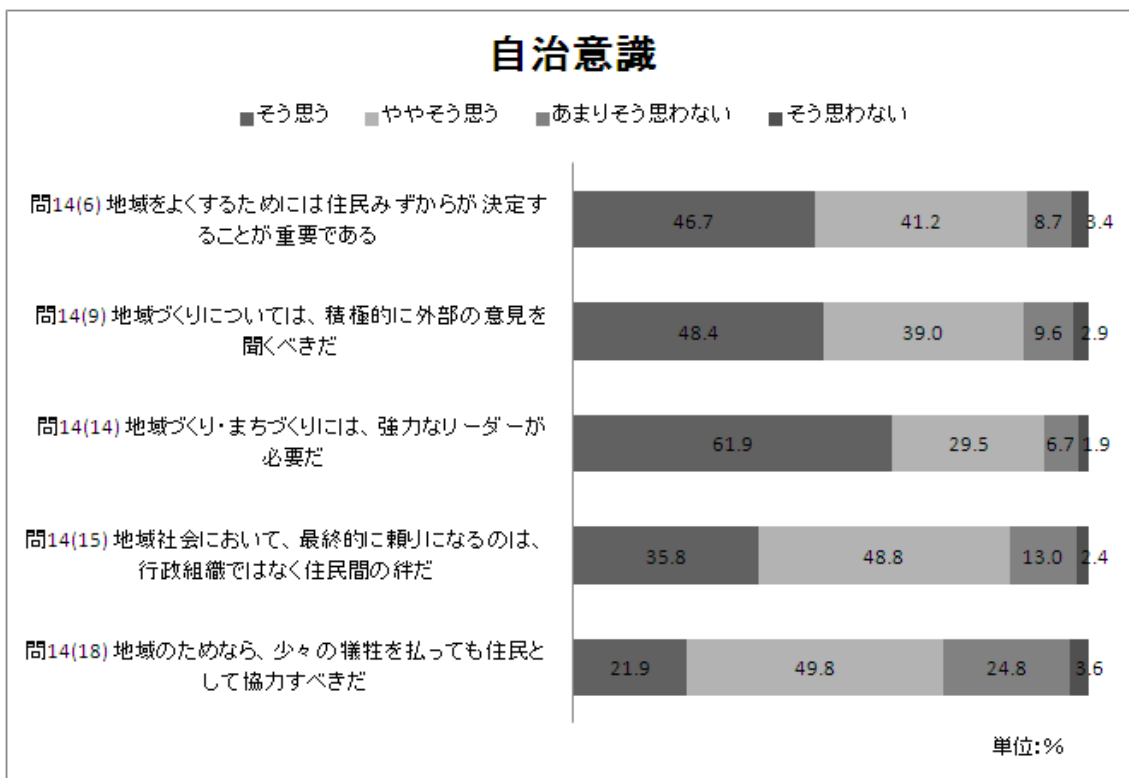


図 11

(18)以外については、どの質問も肯定的意見が8割を超えている。特に、リーダーが必要と答えたのは、9割近くになっている。また、自治意識を聞く質問(6)についても、ほとんどの人が肯定的な意見をもっている。なお絆について聞いた質問(15)については、「東日本大震災」の影響があるということは否定できないだろう。実際に災害によって行政機能が失われることがあるということを知り、また震災後の報道に影響され、行政頼りではなく住民間の絆を改めて考え直したのかもしれない。(18)については、自己犠牲が必要がある場合協力するかどうかを聞いたものだが、この問については他と比べて否定的意見が多かった。不利益が自分に降りかかるといった場合は、やはり協力しないという意見

が増えるようであるが、それにも関わらず協力すべきだと回答している人は7割程度いる。

これらの質問のなかで、各属性において統計的な差がみられたのは、(14)(15)である。これらのどちらも、性別で回答傾向が異なっている。これについていえば、あまり重要なものとは思えないが、一応結果を示しておく。結果をみると、どちらの質問についても、男性より女性の方が肯定的な意見をもっているということが示されている（問 14(14)：男性 87.2%、女性 95.3%、 $\chi^2=8.75$ 、 $df=1$ 、 $p<.01$ ／問 14(15)：男性 81.4%、女性 88.8%、 $\chi^2=4.76$ 、 $df=1$ 、 $p<.05$ ）。これを解釈するならば、男性よりも女性の方が、まちづくりには強力なリーダーが必要だと思っており、最終的に絆が頼りだと思っているのも女性の方が「より」多いということである。

先にみたように、地域参加にたいして消極的な意識も確かに存在しているが、これらの回答をみるといずれも肯定的な意見が多数を占めている。これまでみてきたように、積極的に地域参加したいという意識をもっており、自治意識も高い。しかしその一方で、誰かがやってくれるとか、自分に関係なければ参加しないという意識もみられる。これらのすこし矛盾する意識について考えてみよう。この点について、消極的意識を聞く質問である問 14(5)「自分に関係なければ地域の活動に積極的に参加しようと思わない」、問 14(10)「地域のことは、自分が行動をおこさなくても誰かがやってくれる」と、自治意識を聞く質問との関係をみてみた。結果は予想に難くなく、問 14(5)(10)について肯定的・否定的であるに関わらず、自治意識にかんする質問にたいしては肯定的回答が8割を超えている。こうした結果を解釈すると、積極的に地域社会で活動しようとは思っていない人においても、地域の自治のあるべき「理念」、すなわち住民の自己決定ということや住民間の絆を大切に

表 5 問 14(10)×問 14(18)のクロス表

			問 14(18)		
			地域のためなら、少々 の犠牲を払っても住民 として協力すべきだ		
			肯定的	否定的	合計
肯定的に考 えているよう である。	問 14(10)	肯定的	度数 113	66	179
この点につ いて、補足的 に一つだけデ ータを示して おこう。下記 の表は、問 14(10)と問 14(18)とのクロス表である。問 14(10)については、先に「タダ乗り意識」と呼んだ。このタダ乗り意識を持っている人（問 14(10)を肯定している人）のなかで、問			% 63.1%	36.9%	100%
		否定的	度数 185	51	236
			% 78.4%	21.6%	100%
		合計	度数 298	117	415
			% 71.8%	28.2%	100%

$\chi^2=11.71$, $df=1$, $p<.01$

14(18)に肯定的に回答したのは 63.1%、否定的に回答したのは 36.9%であった。これはタダ乗り意識を持っていない人に比べて、それぞれ 15 ポイントの違いがみられる。この数字をどう解釈するかは難しい。解釈の候補をいくつか示しておくと、①「タダ乗り意識がある人【でも】その 6 割の人は自治の理念を信頼している」という解釈、②「タダ乗り意識のある人の 4 割程度は、やはり自己犠牲をしてまで協力することはないと考えている」という解釈、③「タダ乗り意識を持っていない人でも、その 2 割の人は自己を犠牲にしてまで住民と協力したくはないと思っている」という解釈、この 3 つだ。

問 14(10)と問 14(15)の関係をみると、タダ乗り意識を持っていない人のなかで 88.1%が「住民間の絆が頼り」と答え、タダ乗り意識を持っている人のなかでも 80.0%が「住民間の絆が頼り」と答えているということを考えると、直接的な根拠にはならないけれども、個人的には、ここではポジティブに、可能性の広がる①の解釈を採用してみたい。同じことの繰り返しにはなるが、こうした解釈（認識）を基にして、「このような意識をどのようにして地域のカへと変えていくのか」ということが本当に重要なことだろう。

◆その他の地域意識

以上のものに関係しないと考えられる質問を以下に示す。それらは、

問 14(8)今住んでいる地域はこのまま廃れていくだろうから、地域づくりなどは意味はない、

問 14(11)最近地域の繋がりが弱くなったと感じる、

問 14(19)地域社会がよくならなければ、自分の生活も良くならない、

問 14(21)現在住んでいる地域の未来に、希望を持っている、

である。

結果は次の通り。

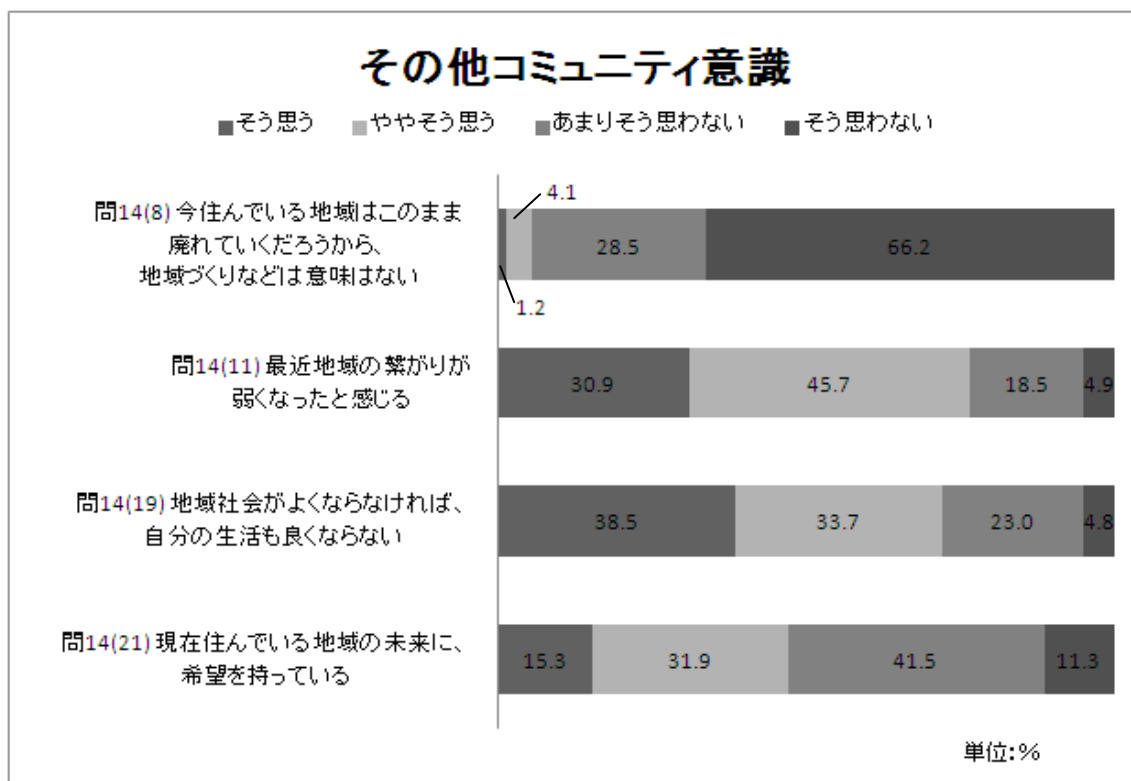


図 12

(8)については、9割以上の方が否定的な意見を持っている。(11)(19)についていうと、7割以上の方が、肯定的な意見を持っている。(21)については、肯定的意見より否定的意見のほうが多くなっている。(8)と(21)の結果をみると、市民のこれからの地域にたいする相対立するな考えが表れている。すなわち、地域づくり・まちづくりにたいして意味はないとは思っていないけれども、この先地域がよくなっていくのかどうかかわからないという意識があるようである。

属性による違いをみてみると、(11)について、年代による違いがみられた(図 13)。50歳以上の世代のほうが、そうでない世代より、地域の繋がりが弱くなっていると回答

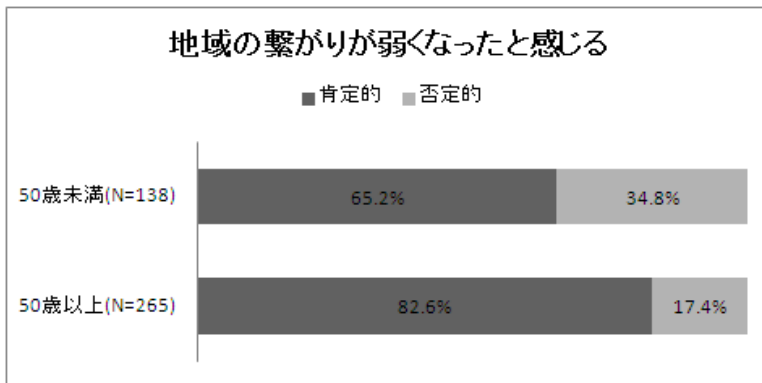


図 13

している（50歳未満の世代 65.2%、50歳以上の世代 82.6%、 $\chi^2=15.40$ 、 $df=1$ 、 $p<.01$ ）。

(19)についていうと、年代では50歳以上の世代、職業では農林・自営・自由業の人たちが、質問に対して肯定的な回答をしている（50歳未

満の世代 61.2%、50歳以上の世代 78.9%、 $\chi^2=14.61$ 、 $df=1$ 、 $p<.01$ ／正社員・役員 68.2%、農林・自営・自由業 84.1%、パート・学生・主婦等 69.8%、 $\chi^2=7.40$ 、 $df=2$ 、 $p<.05$ ）（図 14）。こうした結果について解釈すれば、農林業・自営業の人たちは仕事柄

そのように思うことが多いからと考えられ、50歳以上の世代については、彼らの地域社会への回帰という流れが反映されていると考えられる。

(21)についていうと、愛着心によって違いが表れた（図 15）。いうまでもないが、愛着心を感じていない人たちのほうが、否定的な意見が多かった（愛着心を感じる 47.1%、愛着心を感じていない 89.1%、 $\chi^2=33.79$ 、 $df=1$ 、 $p<.01$ ）。

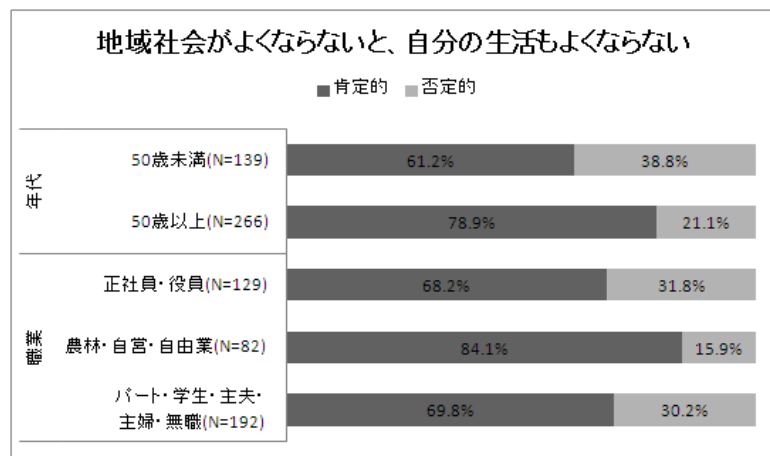


図 14

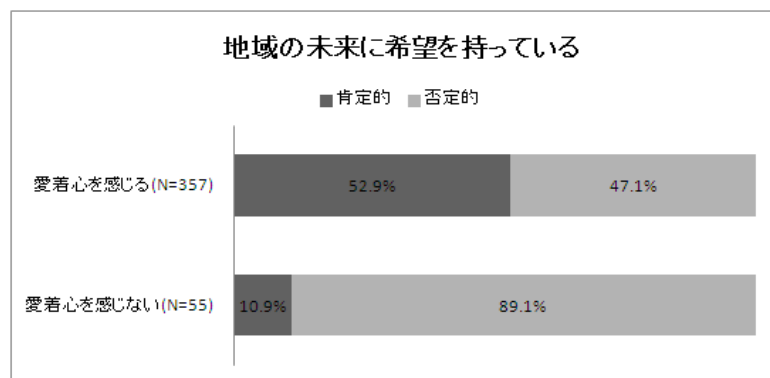


図 15

【まとめ】

これまで唐津市民のコミュニティ意識についてみてきた。もう一度全体を振り返ってみよう。

市民のなかでは、地域に積極的に参加したいという「意識」は総じて高い。しかし、自ら先頭に立って地域を創っていくというリーダーシップの意識は低くなっている。自治会の世話役を担ってもいいと思っているのは、女性より男性、50歳未満の世代より50歳以上の世代となっており、さらに居住年数が10年以上となると年代に関係なく4割程度の人が自治会の世話役になってもよいと答えている。

地域活動に参加する意識について分析すると、何度も述べたように積極的な意識は高い。その内実をみてみると、利己的な理由であれば参加すると考えているのが全体の2割ほどおり、みんなのためという理由で参加すると考えているのは全体の3割から4割となっている。地域活動に消極的なのは、女性、50歳未満の世代、居住年数10年未満、愛着心を感じていない人、である。

行政との関係についていうと、ほとんどの市民が、行政にまちづくりのリーダーシップを執って欲しいと思っており、また行政と協力関係が必要だと思っている。政治的有効性感覚については、性別と年代で分かれた。

自治意識についていうと、ほとんどの市民が、住民の自己決定を重要だと考え、住民間の絆が最終的に頼りになると考え、多少の犠牲を払っても住民どうしで協力するべきと考えている。

こうした事実を踏まえ、かつ前章で確認したように50歳未満の世代における他者との交流の減少という事実をも踏まえたうえで、これからのコミュニティを考えていかなければならない。